医薬品情報 NEWS

2025.8.27　薬剤科

薬剤性パーキンソニズムを発症する可能性のある医薬品

前号では薬剤性パーキンソニズムの機序や早期発見のポイントについて紹介させていただきました。今号では薬剤性パーキンソニズムを引き起こす可能性のある医薬品を一覧表としてまとめましたので提示させていただきます。

分類	薬理学的機序	一般名	主な商品名	採用している剤形
第一世代抗精神病薬	ドパミンD2受容体拮抗薬	ハロペリドール	セレネース	注射
		フルフェナジン	フルメジン	ー
		ペルフェナジン	ピーゼットシー	ー
		クロルプロマジン	コントミン	ー
第二世代抗精神病薬	ドパミンD2受容体拮抗薬	クロザピン	クロザリル	ー
		オランザピン	ジプレキサ	内服
		クエチアピン	セロクエル	内服
		リスペリドン	リスパダール	内服
		スルピリド	ドグマチール	内服
非定型抗精神病薬	部分ドパミンD2受容体拮抗薬	アリピプラゾール	エビリファイ	ー
		ブレクスピプラゾール	レキサルティ	内服
制吐剤	ドパミンD2受容体拮抗薬	メトクロプラミド	プリンペラン	内服・注射
その他		炭酸リチウム	リーマス	ー
		バルプロ酸	デパケン、セレニカR	内服
	SSRI (選択的セロトニン再取り込み阻害薬)	パロキセチン	パキシル	内服
		エスシタロプラム	レクサプロ	ー
		セルトラリン	ジェイゾロフト	ー
		フルボキサミン	デプロメール、ルボックス	ー
	SNRI (セロトニン・ノルアドレナリン再取り込み阻害薬)	デュロキセチン	サインバルタ	内服

…院内採用品

※「重篤副作用疾患別対応マニュアル　薬剤性パーキンソニズム」を「各種添付文書」を参考に作成

参考　重篤副作用疾患別対応マニュアル　薬剤性パーキンソニズム
医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律
(以下､医薬品医療機器等法) 第68条の10に基づく副作用報告件数(医薬品別)

年度	副作用名	医薬品名	
2018年度 (2021年4月集計)	パーキンソニズム	スルピリド	35
		リスペリドン	12
		オランザピン	11
		アリピプラゾール	3
		デュロキセチン塩酸塩	3
		ハロペリドール	3
		メトクロプラミド	3
		その他	36
		合計	106
2019年度 (2021年4月集計)	パーキンソニズム	アリピプラゾール	21
		オランザピン	5
		ハロペリドール	5
		スルピリド	4
		ドネペジル塩酸塩	4
		アリピプラゾール水和物	3
		クエチアピンフマル酸塩	3
		リスペリドン	3
		レボメプロマジンマレイン酸塩	3
		その他	37
		合計	88

○注意事項
1）医薬品医療機器等法 第６８条の１０の規定に基づき報告があったもののうち、報告の多い推定原因医薬品を列記したもの。
2）医薬品医療機器等法に基づく副作用報告は、医薬品の副作用によるものと疑われる症例を報告するものであるが、医薬品との因果関係が認められないものや情報不足等により評価できないものも幅広く報告されている。
3）報告件数の順位については、各医薬品の販売量が異なること、また使用法、使用頻度、併用医薬品、原疾患、合併症等が症例により異なるため、単純に比較できないことに留意すること。

まとめ

前号、今号に渡って薬剤性パーキンソニズムの機序や初期症状、早期発見のポイント、発現する可能性のある薬剤について紹介させていただきました。

チアプリドやリスペリドン、クエチアピンは不穏症状のある方に使用されることが比較的多い薬剤ですが、効果が期待できるからと漫然投与になってしまうと薬剤性パーキンソニズムを引き起こすリスクは高まります。３剤に限らず、一覧表に掲載した薬剤を使用している場合には前号で取り上げた症状の発現がないか、周囲の方々が確認していく必要があります。

気になる症状が見受けられた場合は医療機関へ相談しましょう。

参考文献
・重篤副作用疾患別対応マニュアル　薬剤性パーキンソニズム　https://www.pmda.go.jp/files/000245264.pdf
・ソコスト https://soco-st.com/　からイラストはお借りしました